

「草 堂 寺」

(中文、長安仏教研究叢書の中の一冊)

目 次

まえがき

一 草堂寺の建立、沿革

- 1 寺院建立の歴史的背景
- 2 古寺の始まりおよび逍遙園、草堂寺の分岐
- 3 唐代の草堂寺および興福塔院
- 4 「建福院」への改名と澄観法師
- 5 宋、金、元時代の再建
- 6 明代の「砦」と清代の聖恩寺
- 7 解放前後の草堂寺

二 鳩摩羅什およびその中国文化への貢献

- 1 山海関以南に入る前
- 2 涼州にいた18年間
- 3 最初の国立訳経道場と長安訳経事業
- 4 西域文明を伝える使者
- 5 南に慧遠、北に羅什
- 6 西域道教の僧侶らと草堂寺の逸材
- 7 羅什寺と浄土樹にまつわる言い伝え

三 三論宗の総本山

- 1 「三論」の翻訳およびその大意
- 2 「三論」の伝播と伝授
附 中国三論宗師略伝

四 禅、浄の道場

- 1 飛錫法師と「念仏三昧宝王論」
- 2 圭峰禅師およびその弘法活動

五 草堂碑からみた当寺の組織制度の変遷および世俗政権との関係

六 膨大な寺院経済

- 1 「三千の徳僧一箇所に留まりて、ともに姚秦天王の扶養を受ける」
- 2 宋、金、元時代の草堂寺の経済状況
- 3 明、清および民国期の草堂寺の経済状況

七 日本の日蓮宗と草堂寺の縁

- 1 日蓮宗創立の概要
- 2 喜ばしい第一歩
- 3 「遂にここに至れり」——日蓮宗関係者の心からの願い
附 開眼法会における「中国側読経儀式の内容」

八 草堂寺および「草堂観覧地区」の文物、景観

- 1 鳩摩羅什舍利塔
- 2 煙霧井戸
- 3 「唐の故圭峰定慧禅師碑」
- 4 寺所蔵の「大蔵経」
- 5 明代の大鉄鐘——吊るせない
- 6 「宗派図」碑
- 7 「爬柏龍雀藤と二柏一井戸」
- 8 「敕封大智園正聖僧禅師僧肇碑記」碑
- 9 「石碑廊」
- 10 草堂松竹
- 11 「逍遙三蔵」本堂
- 12 常興寺遺跡および重雲山図碑
- 13 大圓寺と「三尺禁地」石
- 14 宝林寺と敬徳塔
- 15 高冠潭の滝
- 16 紫閣峰、霞を晴らす
- 17 圭峰夜月
- 18 随の太平宮遺跡

付録一 草堂寺碑鈔（全24部）

付録二 草堂寺および「草堂観覧地区」関係の詩

あとがき

7 日本の日蓮宗と草堂寺の縁

1 日蓮宗創立の概要

中日間の仏教関係のはじまりは、「扶桑略記」、「元亨釋書記」の記載のとおり南朝梁武帝の普通3年（522年）である。この年2月、司馬達は日本に渡り、大和阪田原にて庵を結び、仏を祭る。これにより仏教が東海に伝えられた。日本人慧若の著した「釈迦伝」では、仏教の日本への伝来は欽明天皇13年（梁の元帝承聖元年、552年）百済が仏像および経論を供したことに始まると伝えている。もしそうならば、日本への仏教伝来が30年遅いだけでなく、しかも中国から直接ではなく朝鮮を経て間接的に伝来したことになる。諸説さまざま、ここではこれ以上言及しない。随の煬帝の時代、中日間の仏教関係は新たに発展した。唐代には両国仏教界の関係は密接になった。この時、日本は中国に学問僧を派遣し（請益僧、請益生の2種類）、その数は90人にのぼる。これ以後、中国仏教の三論宗、法相宗、華嚴宗、律宗、成実宗、俱舍宗、天台宗、浄土宗などの諸宗派が相次いで日本に伝来した。同時に、漢訳仏教經典の經、律、論の三藏典籍も持ち込まれた。推古天皇（593—628年）の時代、日本人はすでに「法華經」を信仰していた。この後、唐の開元年間に中国を訪れた日本の僧玄昉は多数の仏典を持ち帰った。その数は5,000余巻にのぼり、「開元錄」全集（1,076部、5,048巻）に相当する。「妙法蓮華經」（「法華經」と略す）は、伝えられるところによれば、「諸仏如来秘密の藏、諸經の最上に位する」。しかも東晋時代早くも漢文に翻訳され、これもまた玄昉あるいはそれ以前の人が日本へ運んだものであることは疑いない。

日本の日蓮宗はまたの名を法華宗といい、13世紀に興った。開祖は日蓮。日蓮は初め名を善日といい、法号は生房蓮長、遠江（今日の本州東京の西、静岡県）の人。のちに故郷を離れ安房に到り（今日の東京の東、千葉県）、漁師となる。16才で出家、20才で比叡山にて天台宗の教理を学び、三藏を閲覽、天台宗の奥義を究める。続いて各地の寺院を游歴し、各宗の法門を叩いた。これらを比較した後、仏教は発展の末すでに「末法」時代に入り、釈迦牟尼「本懷」を反映する「法華經」および本經の題目「妙法蓮華經」の5文字を唱えることによってのみ、衆生を救い国家の安泰と民衆の安全を守ることができるようになった。後の深草天皇（1246—1259年）建長5年（中国南宋の理宗宝祐元年、1253年）高い山の山頂に登り、東に昇る旭日に向かって「妙法蓮華經」を10遍唱えたところ、日本が当時何年にもわたり暴風雨、地震、彗星の出現、飢饉、疾病の流行などに悩まされていたのは、「邪教」の流行がなせるものであると悟ったのである。そこで4句の格言を提唱した。即ち、「念仏を唱えるものは無間慈地獄に落ち、坐禅を組むものは天魔である。真言を崇拜信仰するものは必ずや国を滅ぼし、戒律を提唱するものは墮落して国賊となる」。ここに日蓮宗は成立した。以後、日蓮は「立正安国論」を著し、諸宗派を誹謗し、龜山天皇（1260—1227年）の文応元年（中国南宋の理宗景定元年、1260年）執政北条時頼に浄土宗、禅

宗などの禁止と法華經の信仰を要求した。また、そうしなければ国民の安穩はありえないと断言した。その結果、日蓮は伊豆、伊東、佐渡に流罪となった。釈放後、日蓮は鎌倉に戻り、まもなく甲斐（現在の山梨県）に行き身延山に草庵を建て、伝法と著述に専念した。「観心本尊鈔」、「開目鈔」、「立正安国論」、「報恩鈔」、「撰時鈔」などの著作が後世に伝えられている。日蓮はこれらの著作の中で本宗独特の「三大秘法」の教義を示している。即ち、（１）「本門の本尊」。これはまた日蓮直筆の「妙法蓮華經」の５文字題目と「天部諸尊」の十戒がともに具える「蔓荼羅」である。（２）「本門の題目」。即ち、「妙法蓮華經」の５文字が「法華經」の「本門」の精髓である。声に出して唱えることにより本尊への皈依を表わし、身、口、意の三業を清浄にする。（３）「本門の戒壇」の題目は即ち戒体。声に出して唱えることは即ち、無作の円頓戒。「三大秘法」はそれぞれ定（本尊）、慧（題目）、戒（戒壇）に定められている。つまり、そのおおよその意味は、心から本尊に皈依し、題目を唱えれば、その身は成仏でき、また現実の中に仏の国土を実現することができる。その教理や作法からみると、日蓮宗は浄土宗よりなお簡単明瞭である。しかも来世を重視し現世も重視する。これにより仏教が社会の趨勢に合致していることを体現した。日蓮は１２８２年６１才で入寂した（中国元代の至元１９年、日本では後宇多天皇の弘安５年）。１９１２年から１９２６年まで在位した大正天皇は日蓮に「立正大師」の称号を授けた。日蓮が庵を結び伝法した身延山久遠寺は日蓮宗の総本山（即ち、祖庭）である。この宗派には多くの分派がある。日蓮正宗、法華宗本門流、法華宗陣門流、本門法華宗、本門仏立宗などが比較的大きな宗派である。また新興宗教の中で有名なものは、創価学会、霊友会、立正佼成会などがある。

日蓮宗では、その創始の動機、格言および独特の教義の中から、「法華經」が唯一の根拠で尊崇すべき經典とされていることがわかる。紛れもなく、この經典は中国から伝来したものである。「法華經」の漢訳には３種類あり、最初のものは西晋の竺法護（またの名を竺曇摩羅刹）の訳した「正法華經」１０巻本。続いて後秦の弘始８年鳩摩羅什の訳した「妙法蓮華經」８巻本、最後は随代の闍那崛多と達磨笈多の訳した「添品妙法蓮華經」７巻本がある。「法華經」は「無量義經」、「観普賢經」とともに「法華三部經」と称される。「妙法蓮華經」のいわゆる「妙法」とは、説くところの教法は微妙無上であることを意味し、「蓮華經」は即ち、泥の中から出て汚れなく咲く蓮の花を経典の「潔麗」に喩えている。この經典はもともと２７品、後に２８品に増えた。經の中では釈迦牟尼は成仏して以来、寿命は無限、多くの化身となってあらわれ、「種々の方便により微妙法を説き」、とくに「三乗帰一」を称揚し、大小乗の各種の説法と調和しながら、一切の衆生が皆成仏するよう努めている。鳩摩羅什は訳經にあたり「務窮幽旨」を「法華經」の命題とした。このため日蓮は３種の訳本のうち、とくに鳩摩羅什の訳本を選び、開宗の根拠とした。この經の翻訳場所は古都長安の大寺、後の草堂寺である。このため、日蓮宗の人々は草堂寺をその中国における「祖庭」と呼ぶ。また、鳩摩羅什を恩人と呼び、彼への感謝の念は尽きない。

２ 喜ばしい第一歩

さまざまな理由から、中華人民共和国成立後およそ30年間、日本の日蓮宗関係者と中国大陆の信者仲間は面識がなく、草堂寺についても懐旧の想いが自然に薄れていった。しかし俗に、「縁があれば千里の道のりでも必ず相見える」というとおり、中日国交の正常化、中日友好条約の締結および両国人民、両国仏教徒の間の友好交流の急速な発展につれ、日蓮宗関係者はついに、中国大陆のこのあたりの仏教徒の差し伸べた友好の手を取り、喜ばしい第一歩を踏み出した。

1978年、中国仏教協会訪日友好代表団が日本を訪問した。この後、日本の日蓮宗宗務長松村寿顕が中国仏教協会に手紙を出し、友好関係強化を希望し、あわせて訪中団派遣を要望した。1979年10月、日蓮宗の2名の代表が「日宗懇訪華団」の団員としてわが国を訪問した。帰国後、松村顕寿（ママ）は再び訪華団派遣を希望する手紙を出した。1980年4月、中国仏教協会はあらたに招請状を出し、9月上旬、日蓮宗は松井大周を団長とする23名の訪華団を中国に派遣した。訪華団は、滞在中特に草堂寺を参拝した。訪華団の団員は、大部分が住職、副住職で20の寺院や本宗宗務院から集まった。このため、代表团的色彩が比較的強く、中日仏教の友好往来を円満に発展させたいとの日蓮宗関係者の希望のあらわれであった。

日蓮宗第一次訪華代表団は帰国後、「草堂煙霧会」を組織し、資金を集め、中国側の草堂寺修復に協力するとの誓いを立てた。日蓮宗の多くの信徒の願いにより、第一次訪華団団長松井大周は正式に中国仏教協会会長趙樸初氏に書簡を送った。書簡では次のように述べた。1981年は日蓮宗の始祖日蓮の700遠忌報恩節にあたり、日本では一連の記念行事を執り行う。これと同時に鳩摩羅什三蔵法師に恩返しする。その理由は、その一、「わが宗祖日蓮上人（立正大師）の意志であり」、「宗祖が三大論文のひとつ「撰時鈔」（全5巻、日本の重要文化財、小生が住職をつとめる本山妙法華寺内に所持）にて、羅什三蔵を「妙法蓮華經」の訳者として称賛している」。その二、「妙法蓮華經」を唱える宗教団体および信徒団体の立正佼成会、創価学会等の正統派は、わが日蓮宗が羅什三蔵へ恩返しすることに非常に関心を寄せている」。その三、「羅什三蔵の名訳は「妙法蓮華經」の他、「維摩經」、「阿弥陀經」、「般若經」、「大智度論」等があり、日本の仏教各派はほとんど皆羅什三蔵の教恩を受けている。このため三蔵を讃えるについて強い関心がある」。その四、「恩返し」は、「中日仏教界の親密な交流および両国人民の相互友好増進に大きく貢献するであろう」と信ずるものである。松井大周は書簡の中でいくつかの「恩返し」の項目を挙げ（時期を区切って実行し、急ぐものから率先する）、これらの事項を実現するための費用は全て、当宗が責任を以て支払うと述べた。

1982年7月17日－22日、中国仏教協会の招請に応じ、松井大周一行4名が日蓮宗を代表して中国の北京、西安を訪れ、草堂寺に鳩摩羅什像を奉納するなどの件について協議した。日本側団長は協議の中で今回の訪華の目的を繰り返して述べた。つまり、鳩摩羅什に恩返しすることと日中友好を発展させることである。「鳩摩羅什法師の像については、中国の仏書の中から選び、また日本の彫刻技術は貴国に及ばないので、貴国にて高名な技師を招聘し、材質の優れた木材を選び、彫刻して頂けないか。」協議後の決定事項の一は、中国側がヒメツゲを選び一体彫刻する。高さは1m。正面の鳩摩羅什

座像。相応の座台、蓮花台、供台、装飾用祭品と組み合わせる。像完成後、日蓮宗は団を派遣し、草堂寺にて奉納開眼式を行い、中国側は一定数の僧侶および作業員を出してこれを助ける。決議二は、草堂寺本堂内外の環境整備（仏像の選定、搬入、壁塗りを含む）。決議三は、以上各事項の必要経費は中国側が予算を立て（約4、700人民元、彫刻、梱包、運送費は含まない）、日本側が支払う。以上の各事項を実施すると同時に、戸県は環山公路（西安— 峪口—李家荘）から草堂寺までの3kmの道路を開通させる。

このようにして、解放以来二度の修復を経て、草堂寺は第三次の大修理に着手した。1982年から1986年までの草堂寺の改築、増築建造物は、逍遙三蔵殿前の西側建物3間、殿後東西の各3間、東の食堂5間、山門3間、山門の上の趙樸初の書「草堂寺」の寺額がある。このほか寺院の西、西北に土地を6畝増やした（1畝は6.667アール）。

3 「遂にここに至れり」——日蓮宗関係者の心からの願い

1982年3月頃、草堂寺の第一期修復工事が一段落した。本堂内外の装飾も一新し、僧房は清らかに整えられ、庭や階段には塵ひとつない。色鮮やかな紅色の山門および寺院の周囲の壁も古刹の風情を取り戻した。寺の僧たちはおのおのできることに力を尽くし、忙しくも心静かに、より大きな規模で遠来の客を迎えるための準備をしている。

3月中旬、日蓮宗鳩摩羅什三蔵法師足跡顕彰会副会長小林行雄を団長とする日蓮宗訪華使節団先見隊一行5名が西安を訪れ、4月中旬予定の開眼法会の具体的準備のために中国側と最終協議を行った。

4月、日本仏教協会会長に選出されたばかりの金子日威管長を名誉団長に、松井大周を団長に、小林行雄を副団長とする日蓮宗鳩摩羅什三蔵法師足跡顕彰会友好訪華団一行54名が8日、北京到着。全国人民代表大会常務委員会副委員長班禅額尔德・却吉堅贊および中国仏教協会会長趙樸初氏の接見と歓待を受けた。

4月11日午前、訪華団は中国仏教協会会長趙樸初、副会長巨賛に伴われて、航空機にて西安に到着した。同日夜8時、陝西省人民政府は一行の歓迎宴を開いた。

4月13日午前8時、日蓮宗訪華団と中国側僧侶、居士はともに、草堂寺にて共同で鳩摩羅什法師尊像奉納開眼法会を挙行了。日本側僧侶52名（内僧尼10名）、中国側僧侶35名（内僧尼4名、居士6名）。法会が始まると、趙樸初会長と金子日威管長が鳩摩羅什法師尊像の除幕、続いて中国、日本の僧侶がそれぞれのやりかたで参拝、読経した。

法会が終わると、日本の仏教界で名声高く人望厚い金子日威氏が、「本日は成功のうちに忘れがたい法会を営むことができた」、「鳩摩羅什三像法師が妙法蓮華経を翻訳した草堂寺でこのような法会を挙行することができ、宿願を果たした」、「今後日中友好と両国仏教界の友情のために貢献したい」と述べた。金子氏は筆にたっぷりと墨を含ませ一気呵成に、「遂来至此」の4文字を揮毫した。これらの4文字は、氏の鳩摩羅什法師に対する崇敬、敬服を、草堂寺に対する追憶、思慕の情を表わしている。またこの4文字は氏の中日人民の友好事業に力を尽くせる誇りと喜びに溢れている。

この法会にて、趙樸初会長は喜びの気持を抑えきれず、日本式の俳句をしたためた。

題名は「1982年4月13日草堂寺鳩摩羅什三蔵法師尊像奉納開眼法会にて」。詩に曰く、

万緑は庭階を映し、終南の初日は人の来るを照らし、連城煙霧を開く。

仏教は密かなうちにも明らかになり、百福にして莊嚴、

道場に座せば光明は四方を照らす。

気持は共に求め合う。仏法はどうして三大陸にとどまろうか、

ここからから広く流布される。

共に白い牛車を駆り、共に香を手向け法華に礼し、共に法五家を収めよう。

慈悲には縁があり、風と共に法華の雨は天に遍く、世界は莊嚴さに満ちる。

法会の晩、日蓮宗訪華団は答礼宴会を設けた。趙樸初会長は直筆のこの詩を皆の前で朗唱した後、日蓮宗代表団に贈呈した。金子日威管長と訪華団の人々は大いに感激した。訪華団団長松井大周はこの詩を頭上に掲げ、感に堪えない様子で、「趙樸初先生の書かれた詩は、今回の法会活動の最高の記念です。これを本門寺の目立つ所に置き、日本の仏教徒たちに見てもらおう。」と述べた。

今回の法会は、両国仏教徒が友情を深めあっただけでなく、両国人民の友好往来の一つの象徴となった。(以上)